古代越後平野の環境・交通・官衙

坂井秀弥

はじめに

近年、全国的に古代遺跡の調査成果にはめざましいものがある。新潟県においても「沼垂城」「郡司符」の木簡が出土した八幡林遺跡（和島村）、律令祭祀具などとともに大量の漁具が出土した的場遺跡（新潟市）、これに隣接する緒立遺跡（黒埼町）など、広く注目を集めた遺跡がある。これらの遺跡は木簡・墨書土器をはじめとした出土遺物や大型の掘立柱建物などの遺構から、官衙に関連した遺跡と推定されているが、その性格はかならずしも明確ではない。

ところで、これらの遺跡が所在する広大な越後平野は、歴史的にも地理的にも独特な地域である。歴史的には大化年間に渟足柵・磐舟柵という文献史料上最古の城柵が設置され、日本海側における東北経営の起点となった。その後の七世紀末から八世紀初頭にかけては、めまぐるしく国域が変遷するなど、律令国家の辺境ゆえの複雑な動向をみせている。また、古代の越後平野は、現在みるような豊かな水田地帯ではなく、信濃川・阿賀野川の大河が乱流し、大小無数の潟湖が点在する低湿地が広がり、その生産力は低かったと考えられる。しかし、その一方では内水面がいちじるしく発達するという特異な地形でもあり、そこに展開した集落・官衙とそれらを結ぶ交通、そしてさまざまな生産活動も、こうした地理的・歴史的環境を背景にしていたと考えられる。

このような認識のもとに、八幡林遺跡・的場遺跡をはじめとした越後平野の官衙関連遺跡を理解するための前提として、その地理的環境と古墳時代の状況、そして古代の集落・生産・交通について考古資料から整理するのが、この報告の目的である。(1)

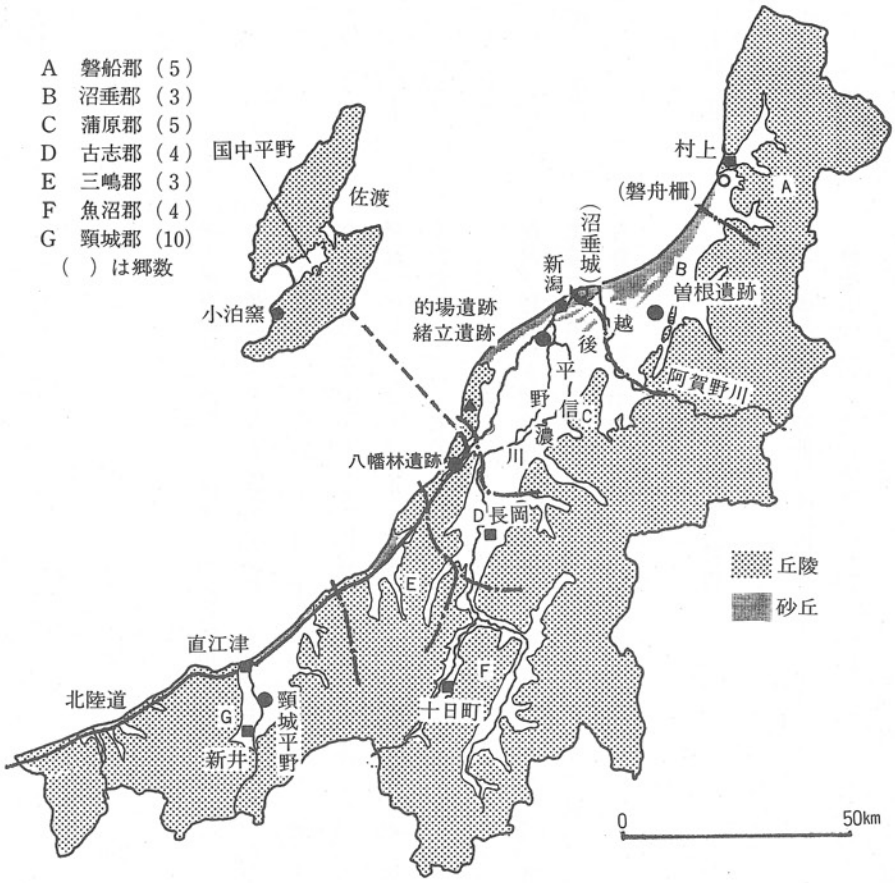
一　越後平野の環境と特性

(一)　地形環境と近世以降の開発（第1・2図）

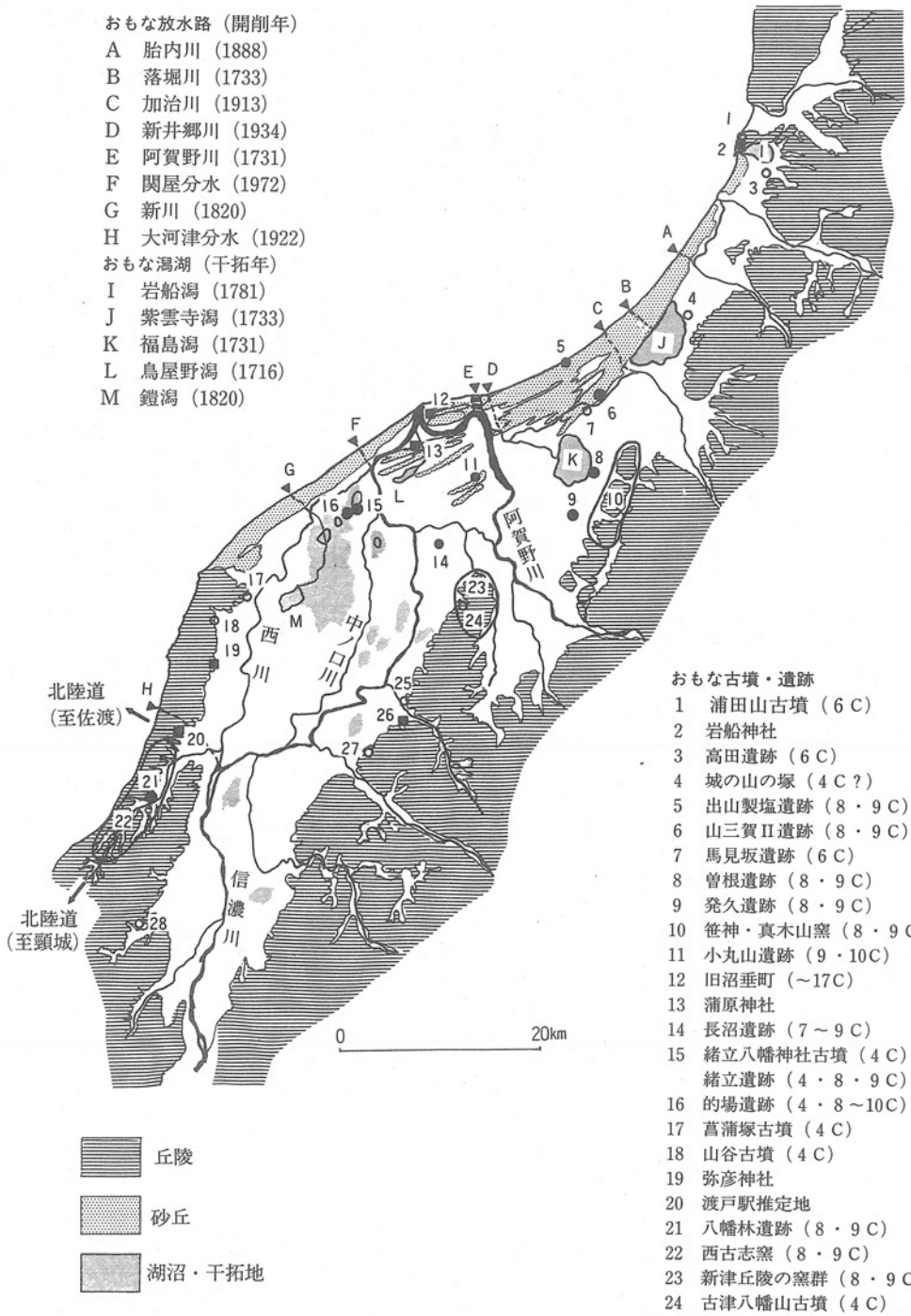
越後平野は、越後の中部から北部にかけて南西から北東に長い形状をもって展開し、その長さは約一〇〇キロある。古代の越後に

は北から磐船・沼垂・蒲原・古志・三嶋・魚沼・頸城の七つの郡があるが、このうち磐船・沼垂・蒲原・古志の四郡までが越後平野に所在する（以下郡名・郡域は古代のものを示す）。平野の西側の海岸には弥彦・角田山塊とそこからつながる新潟砂丘があり、東側には丘陵が横たわる。その間が広大な沖積平野となる。新潟砂丘は日本最大級の規模で、角田山麓から県北部の村上市まで、距離にして約七〇キロメートルあり、場所によっては一〇列も海岸線に平行して存在し、砂丘の標高は平均二〇～三〇メートル、高いところでは四〇メートル以上に達する。

平野の規模も大きい。地形的には基本的に沖積地で、丘陵の裾に近い部分をのぞけば、いちじるしく低平で、見た目にはほとんど平坦である。これを河川の勾配でみると、信濃川の河口から約六〇キロ上流の長岡市でも、標高はわずか二〇メートルにすぎず、その勾配は三〇〇〇分の一である（第3図）。これに対し、越後南西部の頸城平野（高田平野）を流れる関川は、河口から一八キロ上流の新井市ですでに標高六〇メートルに達し、勾配は三〇〇分の一で信濃川の一〇倍もある。越後平野は頸城平野と比し



第１図　古代越後・佐渡の概要図



おもな古墳・遺跡

1　浦田山古墳（6C）
2　岩船神社
3　高田遺跡（6C）
4　城の山の塚（4C？）
5　出山製塩遺跡（8・9C）
6　山三賀Ⅱ遺跡（8・9C）
7　馬見坂遺跡（6C）
8　曽根遺跡（8・9C）
9　発久遺跡（8・9C）
10　笹神・真木山窯（8・9C）
11　小丸山遺跡（9・10C）
12　旧沼垂町（～17C）
13　蒲原神社
14　長沼遺跡（7～9C）
15　緒立八幡神社古墳（4C）
　　緒立遺跡（4・8・9C）
16　的場遺跡（4・8～10C）
17　菖蒲塚古墳（4C）
18　山谷古墳（4C）
19　弥彦神社
20　渡戸駅推定地
21　八幡林遺跡（8・9C）
22　西古志窯（8・9C）
23　新津丘陵の窯群（8・9C）
24　古津八幡山古墳（4C）
25　千刈遺跡（6C）
26　青海神社
27　保内三王山古墳群（4・6C）
28　大萱場古墳（7C）

第2図　越後平野の地形と遺跡分布

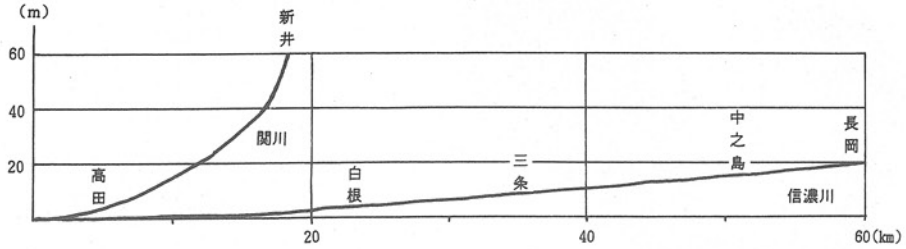
て驚くほど平坦なのである。[3]

この平野を流れるのが信濃川と阿賀野川の二大河川である。これらは全長・流域面積ともに日本有数で、低平な平野部を大きく蛇行して流れ、海岸に存在する巨大な砂丘に流れをさえぎられて直接海に注がず、砂丘の内側には広大な湛水地と後背湿地が形成された（第4図）。現在の海岸には多くの河口があるが、信濃川と北部の荒川をのぞくと、いずれも近世以降に平野部の排水を目的として、人工的に開削された放水路である。阿賀野川の河口も一八世紀前半に開削されたものであり、それまでは砂丘にぶつかったのちは流路を西に変え、信濃川の河口付近に合流していた。[4] 越後平野を流れる大半の河川が信濃川の河口に集まってきたのである。[5]

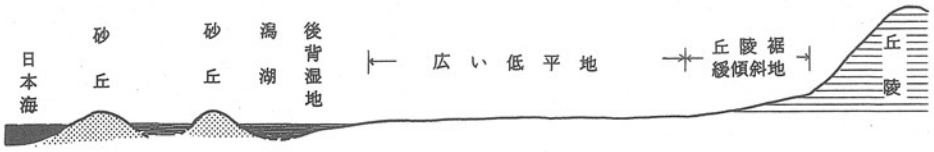
このような地形により、越後平野には多くの潟湖や広い後背湿地と、大小河川の流路とその氾濫原が存在した。また全般に地下水位が高く、排水不良の低湿地が広がっており、集落を営むには適さず、水田化するにしては悪条件であった。そのためつぎの二つの結果をもたらした。第一には河川や潟湖という内水面の交通がとくに発達したということ。第二には耕地の開発が遅れ、生産力がかなり低かったということである。

(二) 内水面交通と河口の港

内水面が発達した地形環境では、当然のこととして陸上交通よりも水上交通が発達する。内水面交通は海上交通に比して安定してお



第3図　信濃川（越後平野）と関川（頸城平野）の勾配



第4図　越後平野の地形断面模式図

り、河川の勾配が小さい越後平野では下りだけではなく上りにも好都合であったと考えられる。内水面交通が発達した状況は、時代はことなるが、近世初期の正保国絵図がよく示し、水路は川筋ばかりではなく砂丘の内陸側にもあり、平野部に網の目のようにはりめぐらされていた〔本山・桑原一九八七〕。また平野から内陸奥深くまで水路が入り込み、上流はさらに信濃・会津の中央部までのびていた。

砂丘の発達する平野部において、港となりうるところは、一定の規模をもつ河川の河口と潟などの入り江しかない。信濃川・阿賀野川水系は発達した内水面をもっており、その河口のもつ意義はきわめて大きい。日本海と広大な内水面は、河口を結節点として、ひとつのネットワークで結ばれることになる。日本海からは信濃川・阿賀野川の河口を経由して、古代の沼垂・蒲原・古志・魚沼の四郡、つまり越後の三分の二以上の範囲に到達することが可能である。逆に河口は広大な地域から物資を集め、日本海から他地域へ広く搬出する地点ともなる。『延喜式』には、越後の国津として「蒲原津」があげられている。「蒲原津」は地名の位置などから、大局的には信濃川の河口に比定される。国津が国府の所在する頸城郡ではなく、信濃川河口に存在するのはこのような理由によると考えられる。的場遺跡・緒立遺跡の性格についてはこうした立地を考慮する必要があろう。また、渟足柵・磐舟柵が河口などに立地することは、日本海側への東北進出が海上ルートで進められたことと符合し、城柵と港との具体的な関連を示唆する。(6)

(三) 耕地と人口

古代の越後は相対的に開発が遅れており、人口も少なかったことは平安時代の『和名抄』の数値などからおおよそ類推される（第1表）。『和名抄』にみる越後の田数は約一万五〇〇〇町である。これに対し越後の約三分の一の面積の越中は約一万八〇〇〇町であり、古代の越後は総面積に対して水田面積の比率がかなり低いことがわかる。この面積は現在の約一〇分の一にすぎず、現在水田となっているところの多くは、古代には水田とはなっていなかったのである。全国的には越中・佐渡などが平均的なあり方で、越

第1表　越後佐渡の田数〔山田1986を改変〕

国　名	郷　数	和名抄(1)（町）	1988年水田(2)（ha）	面　積（㎢）
越　後	34	14,997	163,167	11,253
佐　渡	22	3,960	9,721	857
越　中	41	17,909	66,100	4,250
大　和	88	17,905	20,400	3,692

注　(1)は田積　(2)は新潟県統計課編『統計からみた新潟県のすがた』1989

後が特異といえるであろう。

越後の推定人口は約九万七〇〇〇人、越中は約八万二〇〇〇人である〔沢田一九二七〕。面積との比率を考えると、越後の人口密度はかなり低く、耕地の絶対的な少なさを裏付ける。ただし越後のなかでは頸城地方だけは相対的に開発が進んでいたと推定される。越後には七つの郡があり、郷は磐船郡の余戸を含めて三四ある（第1表）。頸城郡には全体の約三分の一に当たる一〇郷があり、ほかの郡の三～五郷との差は大きい。一郷当たりの人口は大きな差はないと推測され、頸城郡の平野部の面積がほかの郡よりとくに広いことはないことから、頸城郡は人口密度が相対的にかなり高いといえる。そのなかでも一〇郷のうち九郷までが分布する頸城平野の地域は、越後では人口密度がもっとも高く、その背景として生産力も高かったと考えられる。国府が頸城郡に置かれたのも、こうした背景があってのことであろう。

古代の越後は、頸城郡をのぞけば、広大な土地を擁しながら、きわめて少ない耕地しかなく、人口も少なかったのである。その状況は遺跡のあり方[7]からもおおよそうかがうことができる。

二　渟足柵設置以前の越後平野

越後における古墳とその時代の遺跡は、地域性とも関連してか北陸地方西部や関東地方に比してかならずしも多くはなく、その調査例も少ない。したがって、具体的な様相については不分明であるが、おおよその傾向は把握されつつある。それによると五世紀を中心とした空白期を境にその前後は様相が大きく変化する。前期は古墳・集落とも相対的に多いが、中期はほとんど確認できなくなり、後期にはいると少数ながらふたたびあらわれる。以下、集落と古墳にわけて概観する。

㈠　集落の様相

古墳時代前期は、古代の遺跡でもある的場遺跡〔新潟市一九九四〕・緒立遺跡〔黒埼町教育委員会一九九三〕、山三賀Ⅱ遺跡（聖篭町）〔新潟県教育委員会一九八九〕をはじめ多くの遺跡がある。ところがこれらの遺跡は中期の五世紀にはいると衰退し、遺跡はほとんど確認できなくなる。山三賀Ⅱ遺跡が中期初頭で廃絶するのは、前期から中期への変化を象徴している。五世紀代の遺物は新潟市阿賀野川中洲遺跡などで少量採集されている程度である。

後期の六・七世紀の遺跡はいくつか確認されているが、数は少ない。六世紀の遺跡としては、蒲原郡の千刈遺跡（加茂市）、沼垂郡の馬見坂遺跡（新発田市）、磐船郡の高田遺跡（神林村）などが知られている。馬見坂遺跡は未発掘ながら採集されている土器のあり方からみて、比較的規模の大きな集落と考えられるが、ほかの遺跡の実態は不明である。七世紀の遺跡は、末葉に成立するものをのぞくと、

ほとんど皆無である。七世紀後半の三角点下遺跡（村上市）は、海岸に面した標高約五〇メートルの丘陵上に立地するという特殊な遺跡で、磐舟柵の推定地に近いことから、それとの関連が推定される。

後期の集落は、越後平野以外では、頸城地方と魚沼地方を中心にいくつか確認されている。頸城郡の田伏遺跡（糸魚川市）・山畑遺跡（上越市）・一之口遺跡（同）、三嶋郡の高塩B遺跡（西山町）、魚沼郡の馬場上遺跡（十日町市）などである。これらのうち山畑遺跡・一之口遺跡などは多数の竪穴住居を主とした集落の様相が把握されている。越後は他地域に比して遺跡の分布密度が低く、越後平野の地域はそのなかでも相対的に低いといえる。

㈡ 越後における古墳の分布と波及経路（第5図）

集落遺跡は沖積平野に埋没して発見されていない可能性もあるが、古墳のあり方も集落遺跡とほぼ同様である。[8] 前期古墳は近年多くの古墳があらたに発見され、比較的数は多い。平野の東西に分布し、東側には円墳の古津八幡山古墳（新津市）、前方後円墳・前方後方墳・円墳からなる保内三王山古墳群（三条市）、西側には前方後方墳の山谷古墳・前方後円墳の菖蒲塚古墳（巻町）、円墳の緒立遺跡（黒埼町）などがある。これまで前期古墳が確認されていなかった阿賀野川以北にも、古墳の可能性が強い城の山の塚（中条町）がある。最大規模の古墳は径約五六メートルの円墳である古津八幡山古墳、前方後円墳としては全長五四メートルの菖蒲塚古墳で、古墳のランクとしては相対的にかなり低く、古墳が多い前期にあっても生産力の絶対的な低さを示唆する。また単独か二・三基の群で存在し、長期にわたって有力な被葬者集団が存続したようすは認められない。

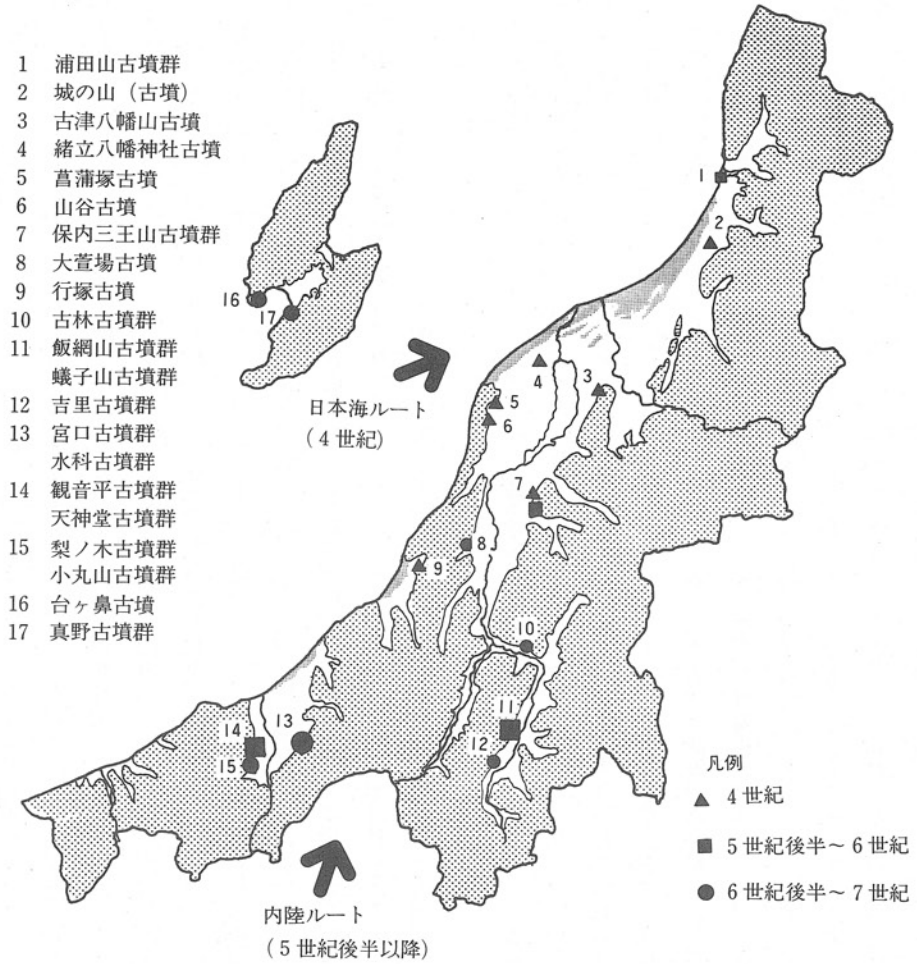
中期古墳はいまのところ確認されていない。ふたたび古墳が確認されるのは五世紀末から六世紀前半頃である。保内三王山古墳群は一〇基以上の木棺直葬墳からなり、北部には北部九州系の竪穴系横口式石室を内部主体とする浦田山古墳群（二基・村上市）が飛石状に分布する。六世紀後半以降全国的に盛行する横穴式石室はまったく見られない。ただし平野南端には横穴式木芯礫室ともいうべき特殊な内部主体をもち、七世紀初頭頃に比定される大萱場古墳（長岡市）が単独で存在する。

このように越後平野では後期の古墳はかなり少なく、なかでも六世紀後半から七世紀にかけての古墳はほとんどみられない。一方、越後平野以外の地域ではこれと対照的なあり方がみられる。頸城地方と魚沼地方においては、五世紀後半から末葉にかけて観音平・天神堂古墳群（新井市）、蟻子山古墳群・飯綱山古墳群（六日町）など、竪穴系の内部主体をもつ大規模な群集墳が出現し、六世紀後半から七世紀には水科・宮口古墳群（三和村・牧村）など、横穴式石室墳を主体とした群集墳があらたに形成される。両地域は信濃・上野国境に近い内陸部に位置し、前期古墳が分布しない点が注目される。

以上のように越後の古墳は時期と地域によりいちじるしく偏在し

ている。これは越後への古墳の波及経路が時期によって大きく変化しているためと考えられる。まず前期においては古墳はほとんど越後平野に集中することから、おもに日本海ルートにより、能登地方から直接的に波及したと考えられる。中期にはいると古墳は急速に衰退した。中期後半から後期に至ると、魚沼地方南部、頸城地方南部に大規模な古墳群が形成されたことから、その成立は内陸ルートによると考えられる。濃尾地方から信濃を経由する古代の東山道にほぼ相当する経路が考えられる。日本海ルートの存在も浦田山古墳群や佐渡の古墳からうかがえるが、内陸ルートより比重はかなり小さい。

集落遺跡と古墳のあり方から見るかぎり、古墳時代の越後の在地社会は、前期・中期・後期と継続的に展開してはおらず、その背景に畿内王権の変化との関係も想定される。[9] とりわけ越後平野では



第5図　越後の時期別古墳分布と波及経路

五世紀代の遺跡と古墳が空白ともいえる状況であり、有力な集落の多くが衰退し、集落の数や人口は減少したと推測される。六・七世紀もいぜん低調で、多くの集落が成立し、活発に耕地が開発されたようすはうかがえない。[10] この状況は阿賀野川を境にしても大きく変わるところはない。七世紀中葉の大化年間に、越後平野の海岸中央に渟足柵が、北端に磐舟柵がそれぞれ設置されるが、その当時の、越後平野の地域はこのような状況であったと考えられる。

三　七世紀後半以降の越後平野

古墳時代のあとの越後では各種の遺跡が確認されるようになり、平安時代の九世紀中葉から後半には集落と手工業生産とも大きな画期があり、地域の様相が総じて変化したことがうかがえる。こうした動向は東日本と共通している。

㈠　集落様相とその画期

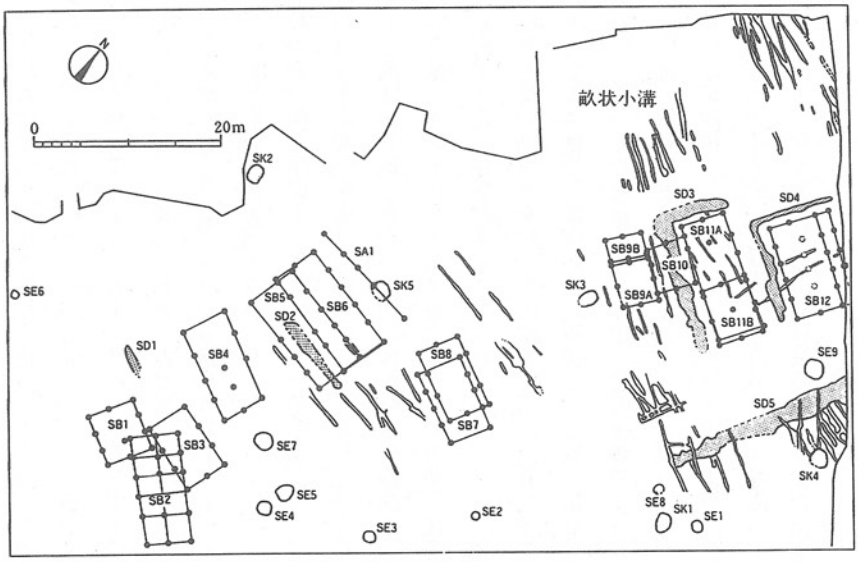
越後平野において七世紀以降にあらたに集落が成立するのは、七世紀末から八世紀初頭である。八世紀代の遺跡数は九世紀中葉以降よりは少ないが、六・七世紀よりは確実に増加している。蒲原郡の長沼遺跡（新津市）〔新津市教育委員会一九九一〕は遺跡の構造は明かではないが、七世紀第4四半期から八世紀第1四半期の遺物がまとまって出土しており、平野部に立地した遺跡としても注目される。阿賀野川以北の沼垂郡の山三賀Ⅱ遺跡（第6図）は八世紀初頭に成立し、九世紀後半に衰退する大規模な集村であり、この時期の典型的な集落と考えられる。住居は竪穴住居が主体で、二・三棟がまとまっているが、それぞれのまとまりは倉庫や井戸を所有せずその自立度は低い。また、砂丘上に立地し、耕地と距離的に離れている点も、のちの小丸山遺跡（新潟市、第7図）〔新潟市教育委員会一九八七・新潟市一九九四〕の集落形態との差は大きい。[11]

山三賀Ⅱ遺跡の衰退期と呼応するように、九世紀中葉から一〇世紀に集落の様相は大きく変化する。遺跡数はいちじるしく多くなり、それまでほとんど遺跡が立地しなかった沖積地のなかの微高地、比較的標高の高い台地・丘陵上にも広く分布する。この時期を代表するのが小丸山遺跡である。住居はすべて掘立柱建物で、二・三棟の建物が井戸・廃棄土坑・畑などを伴って明確な生活と消費の単位を形成する。水田となる沖積地とは地形的に連続し、宅地と耕地との一体化がみられる。こうした集落の成立は山三賀Ⅱ遺跡のような集村の解体と表裏一体の関係にあると考えられる。また郡衙遺跡が衰退する一〇世紀には平面積二〇〇平方メートルほどの大規模な建物を中心とした遺跡が出現する。門新遺跡（和島村）、道下遺跡（田上町）、江向遺跡（上越市）などで、郡衙消滅以後の在地支配の機能をもつと推測される。

㈡　手工業生産の開始と変容

古墳時代の越後では須恵器生産は行なわれなかったが、七世紀末頃から生産が始まる。[12] 古志郡には梯子谷窯跡（出雲崎町）が確認されており、長沼遺跡の須恵器からみて蒲原郡にも七世紀第4四半期に窯が存在した可能性がある。沼垂郡では山三賀Ⅱ遺跡の須恵器からみて八世紀第1四半期から生産開始されたと考えられ、蒲原郡よりは生産開始の時期が若干遅れる可能性がある。このあと九世紀中葉頃までは全般的にさかんに生産される。越後では磐船郡・魚沼郡をのぞくと大規模な生産地があり、越後平野の地域では、古志郡に西古志窯（寺泊町・和島村・出雲崎町）、蒲原郡に新津丘陵の窯群（新津市・五泉市）、沼垂郡に笹神・真木山窯（笹神村・豊浦町）がそれぞれ分布する（第8図）。製品の流通・消費も郡を基本としていたと推定され、的場遺跡・小丸山遺跡は新津丘陵、山三賀Ⅱ遺跡

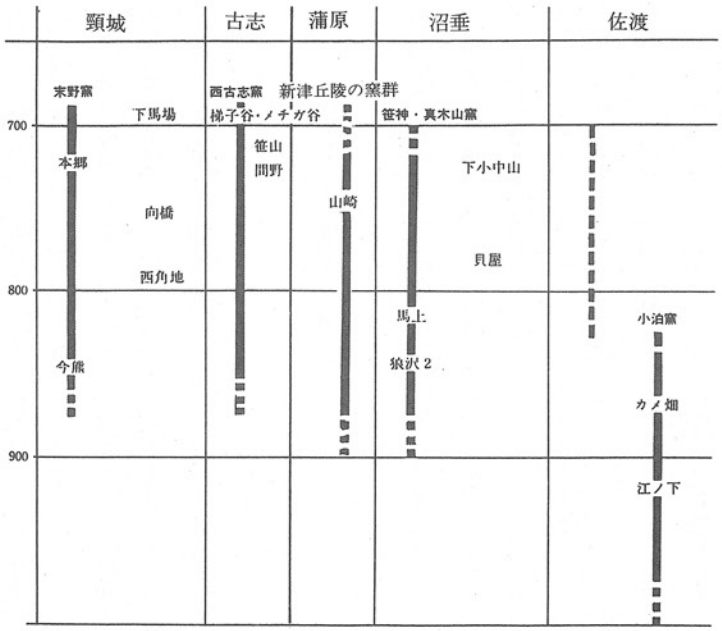
第6図　山三賀Ⅱ遺跡の遺構配置図〔新潟県教育委員会　1989〕



第7図　小丸山遺跡遺構配置図〔新潟市教育委員会　1987〕

は笹神・真木山窯の製品が、それぞれ主体となっている。

須恵器のほかに鉄と塩の生産も七世紀末から八世紀前半にいっせいに始まると推測される。製錬遺跡は須恵器窯とほぼ同様に島崎川流域、新津丘陵、笹神丘陵に分布し、郡ごとの生産と流通のあり方



第8図　越後・佐渡の須恵器窯の編年
〔坂井1989 一部改変〕

がうかがえる。また、海岸では塩の生産が行なわれた。沼垂郡では出山遺跡（新潟市）とその周辺に八世紀第2四半期から九世紀後半まで継続する製塩遺跡がある。このほかにもさまざまな手工業生産が行なわれたものと思われる。

越後の須恵器窯は九世紀後半から末葉にいっせいに衰退する。それにかわって流通するのが、佐渡島の小泊窯（羽茂町）の製品である。小泊窯は九世紀第2四半期には成立する大規模な窯で、一〇世紀後半に衰退する。九世紀後半から一〇世紀前半には越後全域において圧倒的なシェアを占める。窯の立地は島内よりも島外の流通に適しており、越後全域を市場にすることをめざして成立したと考えられる。それを可能にしたのは、物資の輸送に適した内水面が発達しているという越後の地理的条件であり、その背景に生産と流通をそれぞれ掌握していた佐渡と越後の国衙が提携して関与したことが推察される〔春日一九九一〕。

このように集落と手工業生産の画期は一致しており、地域社会の様相をよく示す。古墳時代のあとに本格的な動きが見られるのが七世紀末から八世紀初頭であり、『日本書紀』にみえる渟足柵・磐舟柵の設置から約半世紀後である。両柵とも柵戸が置かれたが、城柵の設置により越後平野の地域がすみやかに開発され、律令社会が定着するような状況はみられず、渟足柵は半世紀に近い間あたかも越後平野中央に孤立するかのような存在であったと思われ、大化年代

という早い時期に設置された渟足柵・磐舟柵の当初の機能の一端が示唆される。[13] その後八世紀から、九世紀中葉までは律令体制と連動した地域開発が行なわれ、九世紀中葉から一〇世紀はそれを基盤にあらたな社会に展開したと評価されよう。なお、城柵が設置された阿賀北地方阿賀野川以北における集落の編成、須恵器生産の開始などは、現在のところ八世紀初頭以降に確認され、阿賀野川以南の蒲原・古志郡の地域より若干遅れる可能性はあるが、八世紀の第2四半期にはそれも隆盛し、後述するように曽根遺跡などの官衙遺跡も成立して、阿賀野川以南の地域と様相が大きくことなるようすはない。

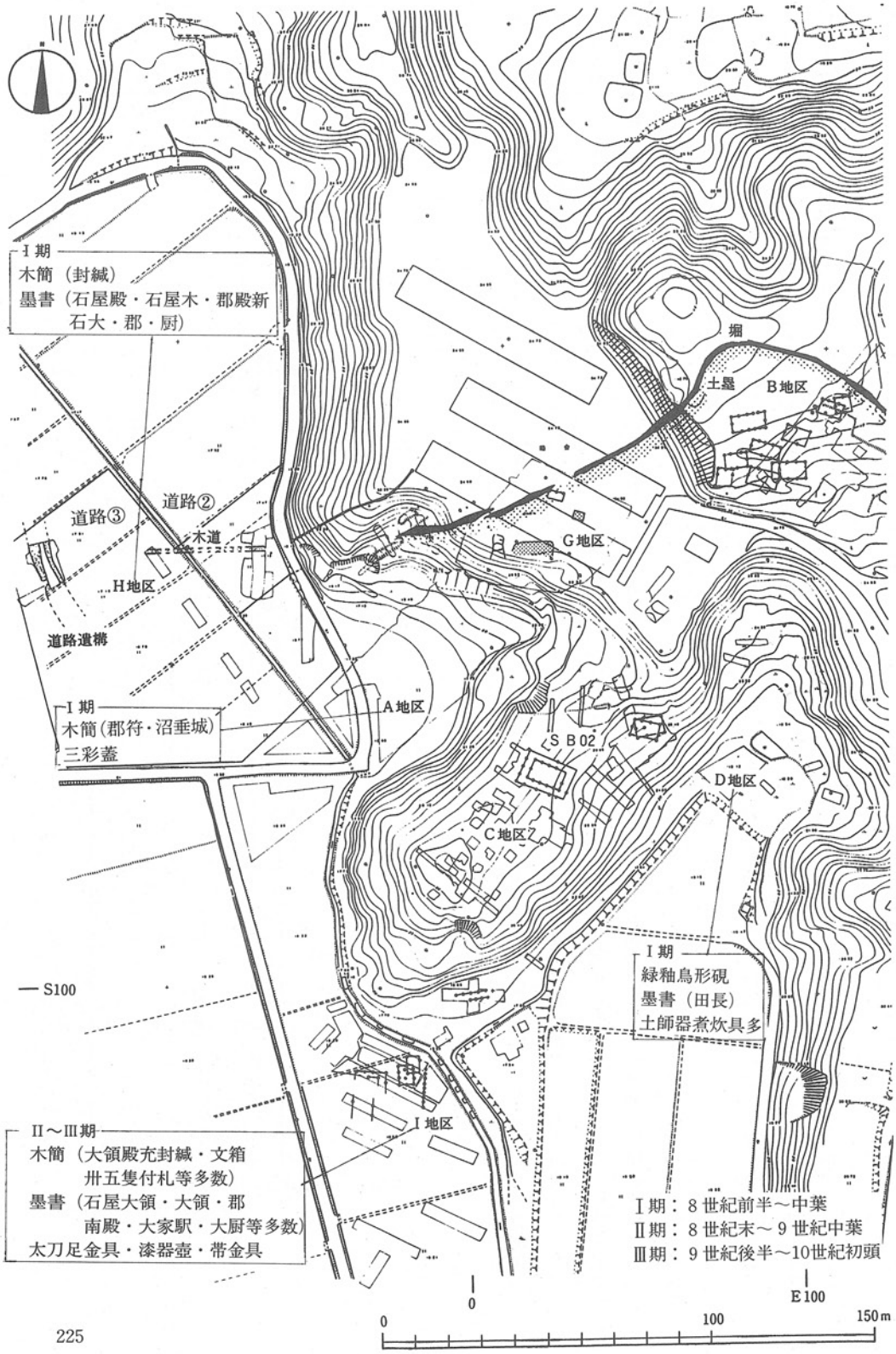
四　官衙関連遺跡と交通

㈠　八幡林遺跡〔和島村教育委員会一九九二～九四〕

三島郡和島村所在。越後平野の南辺西端、信濃川の支流の島崎川流域の谷に位置する。遺跡は越後平野から約八キロほど谷に入ったところの、半島状に突き出た低い丘陵上とそれを取り巻く低地に立地する。所属は古志郡である。八世紀前半に成立し、一〇世紀初頭に廃絶した。この間遺構の分布や構成によりおおよそ三時期の変遷がある。丘陵上には一部竪穴住居を含む掘立柱建物群があり、その一角に大型の四面廂付建物（C地区SBO二）がある。その直下の低地にも建物群があり、周辺には道路遺構もある（第9図）。

墨書土器には二〇点ほどの「大領」のほかに「郡」「郡殿新」などがあり、木簡には「上大領殿門」「上郡殿門」と記した封緘木簡が出土していることから、定型的な政庁と倉庫群は検出されていないものの、大領の館などの古志郡衙を構成する主要な施設が存在したものと推定される。ただし、沼垂城との直接的な関係を示す木簡や隣の蒲原郡符が出土しており、初期にはただたんなる郡衙ではなく、国府直轄の施設である沼垂城[14]とも密接に関連する機能[15]も想定される。

遺跡からは北陸道の駅家である「大家驛」という九世紀の墨書土器が出土している。島崎川の谷に古代の北陸道駅路が通っており、付近に駅家が存在したと考えられる。北陸道は、ここから少し北へ進んで海岸に出て佐渡へ渡るが、越後においては越後国府[16]が所在する頸城地方と越後平野とを結ぶ幹線交通路である。また、この遺跡から北は内水面を基盤とした越後平野の交通網に直結し、水陸の交通の交替地点でもある。越後平野の東西の動脈は信濃川と西川であり、ここからはともに近い。島崎川・西川、信濃川を介して的場遺跡・緒立遺跡、信濃川河口の蒲原津、さらには阿賀野川の河口の沼垂城とも結ばれる。八幡林遺跡は国府のある頸城地方と沼垂城のほぼ中間にあり、ここを中継点として、頸城平野（国府）―八幡林遺跡―越後平野（的場・緒立遺跡、沼垂城）という越後の交通体系が成



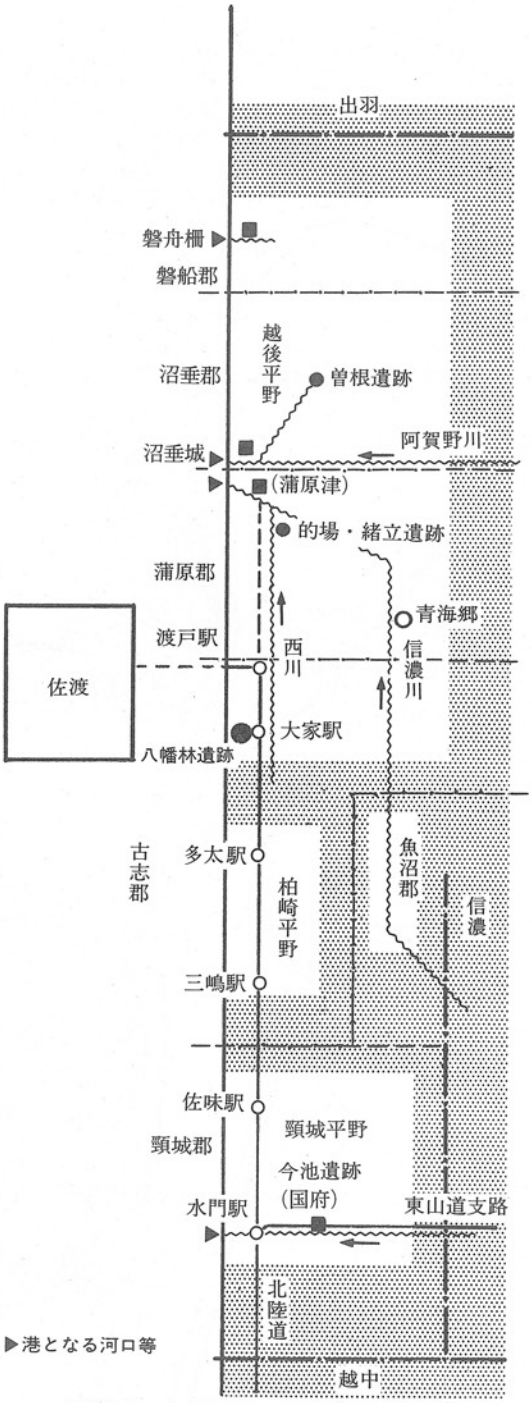
第9図　八幡林遺跡の主要遺構配置と各地区の主要時期・遺物

立したことになる（第10図）。このような交通上の重要な位置からも、郡衙のほかに国府の出先機関や、駅家などが併置された複合的な官衙群を形成していたと推察される。

（二）的場遺跡・緒立遺跡〔新潟市一九九四・黒埼町教育委員会一九九三〕

的場遺跡は新潟市、緒立遺跡はそのとなりの黒埼町に所在する。二つの遺跡は信濃川の河口から約一〇キロの大低湿地帯に位置し、信濃川とその支流の西川の分岐点の近くに所在する。[17] 的場遺跡は潟湖に面した埋没砂丘上に立地し、緒立遺跡はこの西方七〇〇～八〇〇メートルに位置する。所属は蒲原郡である。両者とも八世紀第2四半期頃に成立し、緒立遺跡は九世紀後半に、的場遺跡は一〇世紀後半頃に衰退する。遺構・遺物の内容は共通し、たがいに密接に関連した遺跡と考えられる。建物遺構はすべて掘立柱建物で、ともに大規模な総柱建物がみられる（第11図）。ここでは的場遺跡から遺跡の様相を概観しておく。

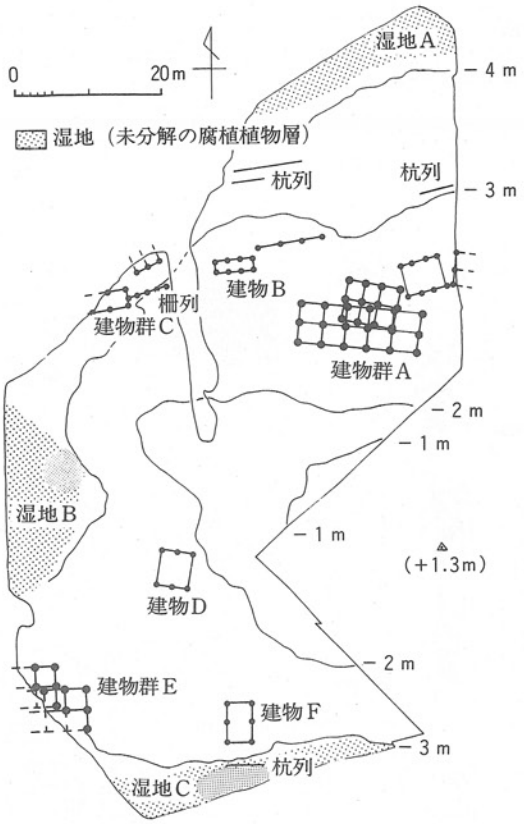
出土遺物には農具はまったくみられないが、土錘・浮子・網針・櫂などを含む大量の漁具が注目される（第12図）。立地条件や大型の浮子、「杉人鮭」の木簡、鮭の骨の出土などから、鮭をはじめとし



第10図　古代越後の交通体系概念図
（8世紀前半～中葉頃）

た内水面の漁撈が行なわれていたと推定される。このほか官衙遺跡に特徴的な律令官人や律令祭祀に関連した遺物も豊富である（第13図）。装身具には櫛・檜扇・下駄・木沓、帯金具、大刀足金具、祭祀具には斎串・人形・舟形・馬形・刀形・琴柱などがあり、ほかに独楽や和同開珎二〇枚の埋納遺構も注目される。土器は一般集落ではほとんどみられない器種が多く、緑釉・灰釉陶器や京都篠窯の須恵器鉢などもあり、「狄食」などの木簡や多量の墨書土器も出土している。緒立遺跡では人面墨書土器・サイコロが注目される。

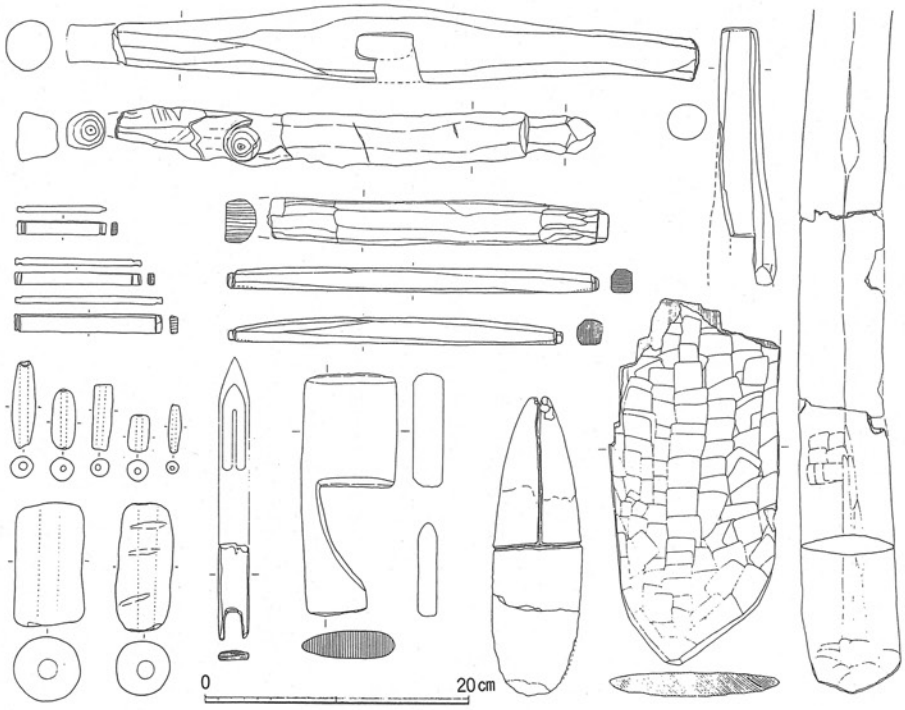
二つの遺跡は鮭をはじめとした内水面漁業の基地で、捕獲した水産物を加工する場でもあったと考えられ、出土遺物や遺構からみて、その経営には官衙が関わっていたと推測される。越後は調庸・中男作物・年料貢進御贄として、鮭や氷頭・背腸などの加工品を貢進していた。また鮭は平安後期に東大寺封物として代納され、『新猿楽記』には漆とともに越後の特産物としてあげられており、越後にとって特別の意義をもつ重要な産物であった。こうしたことから律令期においては、国衙などの官衙[18]が鮭を捕獲・加工し、官衙に供給したり貢進していたと推定される。また重要な港である信濃川の河口に近く、内水面交通に適した立地から、さまざまな物資の流通に関係した性格も想定される。[19]緒立遺跡は的場遺跡よりも広く、その管理的な機能が考えられる。



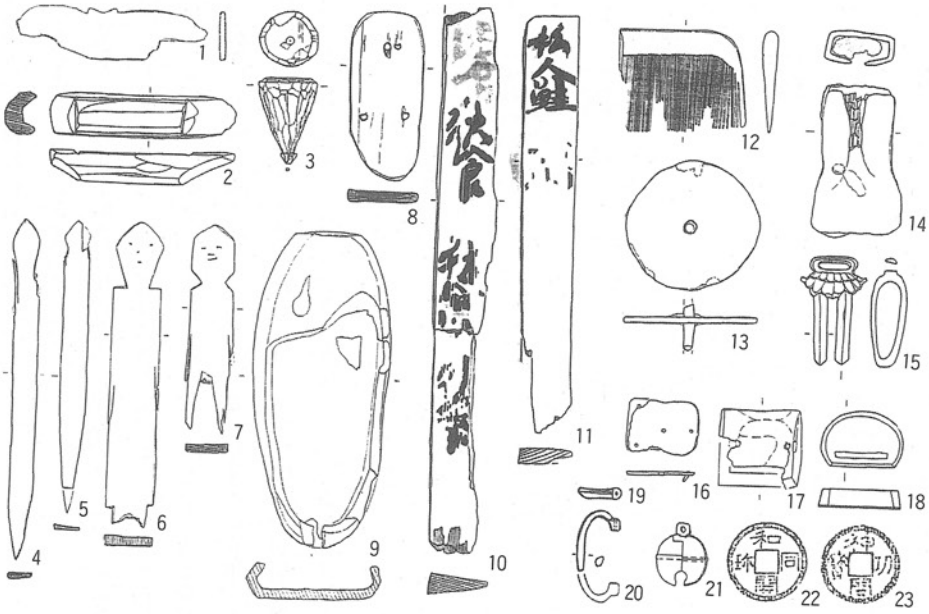
第11図　的場遺跡遺構配置図

㈢　曽根遺跡〔豊浦町教育委員会一九八一・八二〕

北蒲原郡豊浦町所在。阿賀野川以北の沼垂郡内のほぼ中心にある福島潟の湖岸に立地する。福島潟は阿賀野川に通じ、その河口にある沼垂城とも近く、的場遺跡・緒立遺跡などとも水上交通で結ばれる。八世紀前半の第2四半期頃に成立し、九世紀後半に衰退する。八幡林遺跡、的場遺跡・緒立遺跡と合せてほぼ同時に官衙関連遺跡が成立することになり、この時期が当地域の大きな画期と考えられ



第12図　的場遺跡出土漁撈関係遺物〔新潟市　1994〕



第13図　的場遺跡出土律令祭祀・官人関係遺物〔新潟市　1994〕

る。桁行二間から四間の掘立柱建物が多く、竪穴住居はない（第14図）。この時期の集落に一般にみられない井戸が数基ある。文字は不明であるが、付札木簡が出土しており、墨書土器には「郡」「上殿」などがある。ほかに「王」字状の刻印をもつ須恵器、円面硯、斎串や舟形などの律令祭祀具、檜扇・木沓などがある。

出土遺物には農具はまったくなく、広大な潟湖をひかえた周辺の地形からも農業生産を基盤とした遺跡とは考えられない。一方、背後の笹神丘陵には須恵器と鉄の大生産地があり、その盛衰と遺跡の時期はほぼ一致しており、「王」字状刻印の須恵器や焼歪みのある須恵器の出土もそうした生産地との関連を示唆する。前述のように八世紀から九世紀中葉までは、須恵器の生産と流通は郡ごとを基本としている。福島潟は郡内の中央に位置し、内水面交通の要でもあり、流通に適している。したがってこの遺跡は須恵器や鉄などの生産遺跡と一体となり、製品の集積・配送に関わり、同時に種々の物資の流通にもあたる、港に併設された沼垂郡の関連施設と推測される。[20] 笹神丘陵の須恵器窯の衰退に合わせるように、郡の流通拠点である曽根遺跡は九世紀後半に衰退傾向になり、かわって佐渡小泊窯の須恵器が越後に大量に流通するというあらたな時代にはいる。

(四) 発久（ほつきゅう）遺跡〔笹神村教育委員会一九九一〕

北蒲原郡笹神村所在。曽根遺跡の五キロ南の沖積地に位置する。八世紀後半から末に成立し、九世紀後半に衰退する。遺跡の成立時期は他遺跡より遅いことが注目される。狭い範囲の調査のため遺跡の構造は明確ではないが、掘立柱建物と推定される柱穴列があり、遺跡を区画するとも考えられる自然河川かあるいは大規模な溝がある。月朔干支を記した暦様木簡と返抄木簡、「寺」をはじめとした多くの墨書土器が出土している。斎串・檜扇・櫛などのほかに農具や漁具と考えられる遺物もある。周辺の地形は曽根遺跡のように周辺に潟湖や湛水地が広がるような環境ではなく、水田の開発と経営・管理にあたる官衙的な機能をそなえた遺跡と考えられる。

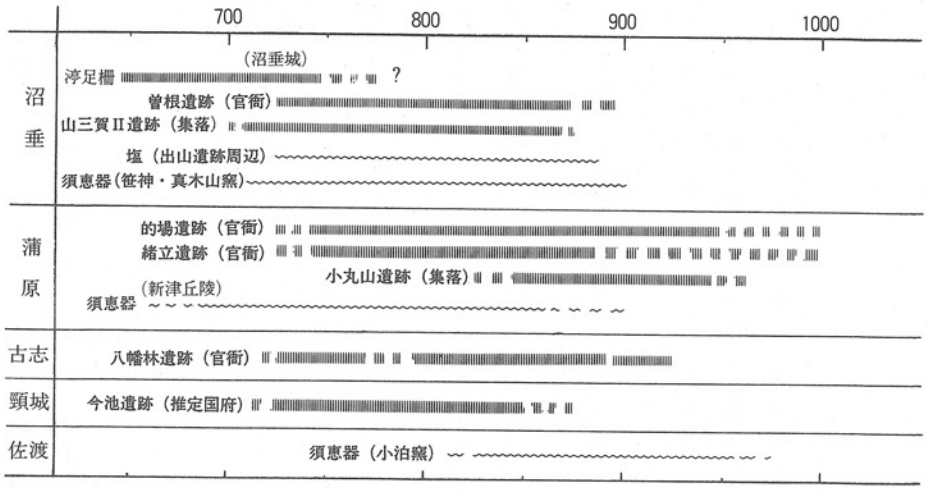
第14図　曽根遺跡遺構配置図

むすびにかえて

これまで越後平野の古墳時代から平安時代までの状況を考古資料から概観してきた。その結果、この地域は全般に古墳時代後期は社会全般の活動が低調であったが、律令体制の確立に呼応するかのように、七世紀末から八世紀初頭の段階で急速に変化し、集落・官衙・手工業生産などが活発に展開したことがうかがえた（第15図）。この時期に越後国の領域はめまぐるしく変化する。持統朝の六九〇年頃に越国が分割され、阿賀北地方は越後国となり、大宝二年（七〇二）に阿賀野川以南の地域が越中国から越後国に編入された。そして、和銅元年（七〇八）の出羽郡設置を経て、同五年（七一二）に出羽国が分立し、ようやくのちの越後の国域が確定する。その背景には律令体制の確立に向けての急速な動きがあり、ある程度それが達成されたと考えられる。[21]

この過程において、渟足柵・磐舟柵が設置された阿賀北地方は、当初阿賀野川以南の地域と別の国であり、渟足柵（沼垂城）が養老年間（七二四まで）までは機能しており、阿賀野川以南の地域と政治的に区別されていたと考えられる。しかし、八世紀前半以降の集落・生産などの様相は、阿賀野川の南北で顕著な差はみられず、[22]この地域の政情は安定し律令的支配が行なわれていたと推測される。

沼垂城がいつまで存続したかは明確ではないが、養老年間以降もなお存続していたとすれば、そのおもな機能は越後の政情安定、律令的支配ではないと考えられる。越後の北には越後国から分かれた



第15図　古代越後平野の官衙・集落・生産の消長

出羽国があり、養老年中に至ってもなお国の体裁を十分に整えていなかったと推定される[23]〔平川一九七八〕。また、出羽国は律令政府にとって大陸を含めた北方地域にたいする拠点としての機能・性格もあった。その出羽を支えたのが海上ルートによって結ばれていた越後である〔渡部一九九一・九二〕。しかしながら、天平九年（七三七）計画、天平宝字三年（七五九）完成の多賀城と出羽を結ぶ陸路の整備などにより、越後国と出羽国の関係は薄くなったと類推される。越後守は養老職員令により出羽・陸奥守とともに蝦夷にたいする饗給・征討・斥候という任務を規定され、的場遺跡の「狄食」の木簡が示すように、九世紀頃まで越後と蝦夷との関係は存続したと推定されるが、八世紀中葉・後半の陸路を基盤にした交通の整備などを契機に、沼垂城が停廃されたことも想定される。

以上、近年の発掘調査の成果をもとに、古代の越後平野について述べてきた。考古資料を素材に加えることによって、この地域の様相はかなり鮮明になったとはいえ、具体的な部分はなお不分明である。たとえば渟足柵・磐舟柵が設置された阿賀北地方がどのような地域で、その設置後どのように展開したかという越後における蝦夷の問題などは、越後全般の今後の調査成果の蓄積をふまえ、多方面から分析することが必要である。今後を期したい。

註

（1）この報告は筆者の旧稿（地形環境については一九九三b、古墳時代については一九九〇・一九九四a、古代の集落については一九八九a・一九九四b、手工業生産については一九八九a・b、交通と官衙については一九九五）をもとにしており、重複する部分も多いことをお断わりしておきたい。

（2）三嶋郡は現在の柏崎市・刈羽郡の地域であるが、平安時代の貞観式で古志郡から分立したものである〔米沢一九八〇〕。

（3）富山平野と金沢平野は、庄川と手取川の流域でそれぞれ三四〇分の一、一六〇分の一であり、越後平野の飛び抜けた平坦さがうかがえる。

（4）近世初期までは阿賀野川は信濃川の河口付近に合流していなかったとされる〔新潟市一九八九〕が、二つの河口は近接してしたことは確実である。

（5）このほか人工の放水路をもつ河川は、阿賀野川以東の加治川・落堀川・新井郷川、信濃川以西の関屋分水・新川・大河津分水などである（第2図）。

（6）渟足柵は阿賀野川の河口、磐舟柵は一八世紀に干拓された岩船潟の入口、秋田城は雄物川の河口といずれも共通した条件をもっている。渟足柵、磐舟柵の立地はそれぞれ港町である沼垂町、岩船町に引き継がれる。

（7）越後平野における遺跡分布は、沖積地中央部にも見られるものの、砂丘上や東西の丘陵裾に比較的多い。しかし、具体的な数値では示せないが、全体の分布密度は他地域に比してかなり低いと考えられる。また越後平野の集落には新田村が多く、近世以降に開発された地区が多かったことが知られる。とくに西蒲原郡・北蒲原郡などの比較的低いところはその割合が高く、信濃川・阿賀野川の河口と下流域を占める新潟市域では、約一五〇の村のうち新田村でないのはわずかに七か

村にすぎない。なお、条里型地割が確認されるのは越後では頸城平野だけである。

(8) 越後の古墳については〔甘粕一九八六・一九九四、坂井一九九〇〕などを参考にした。

(9) 前期から中期の変化は各地でみられる。東北地方も越後と同じく中期に古墳が断絶する〔工藤一九九三〕。畿内においては大王陵級の大型古墳の分布が奈良盆地から河内平野に移動し、この時期畿内地方だけでなく各地の首長層を巻き込んだ内乱があり、これが畿内と各地の変化と密接に関係する可能性がある〔都出一九八九〕。

(10) 手工業生産では、越中以西の北陸地方においては七世紀初頭にのちの郡単位程度に須恵器窯が成立し、越後との差は大きい。

(11) 山三賀Ⅱ遺跡はこの時期の集落の典型例であり、小丸山遺跡はこのちの時期の一つの典型例である。小丸山遺跡の集落形態は上越市一之口遺跡でもみられ、「山三賀型集落」から「一之口型集落」の変化が九世紀においてみられる〔坂井一九九四b〕。

(12) 須恵器の系譜は一部東海地方のものが入っているが、主流は北陸地方である。また、八幡林遺跡出土の木簡には射水・能登・足羽という氏族名・地名がみえ、沼垂・岩船郡の郷名には足羽・坂井・利波などの越前・越中の地名がみられ、北陸地方からの人の移動を含めた強い関連がうかがえる。

(13) 七世紀中葉における渟足柵・磐舟柵の設置は、東アジアの国際情勢を背景に畿内王権が列島の北方の国境を固めようとして日本海側からさかんに進出した動向〔笹山一九九三〕の一環と考えられ、当初の城柵の設置目的は、地域の開発を推進し、その律令的支配をめざすという側面は弱かったと考えられる。

(14) 城柵はあくまでも国府直轄の機関で郡の施設ではない〔平川一九七九〕。

(15) 墨書土器「石屋木」を「石屋柵」か「石屋城」と解釈し、これを八幡林遺跡の具体的な施設名とし、その性格を示唆するという意見もある〔田中一九九四〕。

(16) 『和名抄』には越後の国府は頸城郡に所在したとみえているが、この時期すでに設置されていたと推測される〔坂井一九九三a〕。八幡林遺跡の郡符木簡は蒲原郡司が青海郷の古志君大虫に告朔儀に出席することを命じているが、告朔儀は国府で行なわれたものと考えられ〔小林一九九二〕、頸城郡にあった国府からの帰路に、八幡林遺跡において木簡が処分されたと推測される。

(17) 的場遺跡・緒立遺跡とも古墳時代前期の有力な集落であり、緒立遺跡では古墳も築かれている。その約四〇〇年後の奈良時代にくしくも同じ地点に官衙関連遺跡が成立したのは、遺跡のもつ地形的条件によるのではないかと思われる。ここは信濃川の河口から少し遡上した所で、本流と西方への主要なルートである西川の分岐点に位置し、一面の低湿地の中ではほとんど唯一の安定した土地で、ランドマークにもなる一際目立った高い丘であった。そのために越後平野の内水面にかかわる重要な施設が立地したと考えられる。

(18) 的場遺跡の経営には以下の点などから国衙の関与が類推される。①鮭という越後国の主要な貢進物を捕獲・加工していたこと。②越後は蝦夷の饗給が規定されており、蝦夷に対する食料とみられる「狄食」の木簡が出土していること。③郡衙関連遺跡は九世紀いっぱいで衰退する例が多いが的場遺跡は一〇世紀まで存続すること。④越後の広範囲の内水面交通の要衝に位置し、郡を越えた交通・流通に関係していると推測されること。

(19) 阿賀野川の河口近くに位置する山木戸遺跡（新潟市）でも、九・一〇世紀の石帯や「寺」の墨書土器、京都篠産の須恵器、緑釉・灰釉陶器などが出土しており〔新潟市一九九四〕、港など流通に関連する性

格が想定される。

(20) 荒田目条里遺跡（福島県いわき市）出土の津長にあてられた郡符木簡からは、郡司が港を支配・管理していた例が知られる〔吉田一九九五〕。曽根遺跡も近くに港が所在したと考えられ、これと密接に関連した遺跡の経営にも郡司の関与が想定される。なお荒田目条里遺跡周辺で考えられる港は内陸に向かっては郡域を越える内水面域をもってはない。

(21) 平城京二条大路木簡に「越後国沼足郡深江」があり、七三〇年代には沼垂郡が確認される〔奈良国立文化財研究所一九九四〕。

(22) 阿賀北地方は、土器の地域色などにおいて縄文時代以来東北地方に包摂される特色を有し、八・九世紀においても土器の形態・手法などに阿賀野川以南の地域とはことなる点がみられる。

(23) 八世紀段階では越後と出羽との差は大きいと予想される。山形県庄内地方では八世紀代の集落遺跡・生産遺跡はほとんど確認されておらず、九世紀以降の活発な状況と対照的である。秋田平野では天平五年（七三三）に出羽柵が成立し、須恵器生産は始まるが、八世紀代の集落はほとんど不明であり、面的に広く開発された状況は考え難い。八世紀の出羽は城柵を中心にした点的な開発にとどまっていたと考えられる。

【引用・参考文献】

甘粕　健　一九八六　「古墳時代の社会と文化」『新潟県史』通史編一
甘粕　健　一九九四　「東日本における古墳の出現」『東日本の古墳の出現』　山川出版社
春日真実　一九九一　「古代佐渡小泊窯における須恵器の生産と流通」『新潟考古学談話会会報』八　新潟考古学談話会
金子拓男　一九九二　「沼垂柵と蒲原津と八幡林遺跡」『郷土新潟』三一　新潟郷土史研究会
工藤雅樹　一九九三　「中通の前期古墳」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』平成二年度文部省科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書
黒埼町教育委員会　一九九三　『緒立C遺跡発掘調査概報』
小林昌二　一九九二　「八幡林遺跡等新潟県内出土の木簡」『木簡研究』一四　木簡学会
坂井秀弥　一九八八　「越後・佐渡における古代土器の生産と流通」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題』報告編　石川考古学研究会ほか
坂井秀弥　一九八九a　「古代集落としての山三賀Ⅱ遺跡」『新新バイパス関係発掘調査報告書』　新潟県教育委員会
坂井秀弥　一九八九b　「越後・佐渡における古代手工業生産の展開」『北陸の古代手工業生産の研究』　北陸古代手工業生産史研究会
坂井秀弥　一九九〇　「新潟県の円墳」『古代学研究』一二三　古代学研究会
坂井秀弥　一九九三a　「上越市今池遺跡国府説・本長者原廃寺国分寺説の現状」『新潟考古学談話会会報』一一　新潟考古学談話会
坂井秀弥　一九九三b　「古代越後の環境・生産力・特性」『新潟考古学談話会会報』一二　新潟考古学談話会
坂井秀弥　一九九四a　「渟足柵研究の現状」『新潟考古』五　新潟県考古学会
坂井秀弥　一九九四b　「庁と館、集落と屋敷」『城と館を掘る・読む』山川出版社
坂井秀弥　一九九五　「古代越後の交通と八幡林遺跡」『古代交通研究』四　古代交通研究会
笹神村教育委員会　一九九一　『発久遺跡』

笹山晴生　一九九三　「古代出羽の史的位置」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』八
沢田吾一　一九二七　『奈良朝時代民政経済の数的研究』　冨山房
田中　靖　一九九四　「八幡林遺跡の調査概要」『新潟考古』五　新潟県考古学会
都出比呂志　一九八九　「交易圏と政治組織」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
豊浦町教育委員会　一九八一・八二　『曽根遺跡』Ⅰ・Ⅱ
奈良国立文化財研究所　一九九四　『平城宮発掘調査出土木簡概報』二九
新潟県教育委員会　一九八九　『新新バイパス関係発掘調査報告書・山三賀Ⅱ遺跡』
新潟市　一九八九　『図説新潟市史』新潟市史別編
新潟市　一九九四　『新潟市史』資料編一　原始古代中世
新潟市教育委員会　一九八七　『新潟市小丸山遺跡発掘調査概報』
新津市教育委員会　一九九一　『長沼遺跡発掘調査報告書』
平川　南　一九七八　「古代東北城柵の特質について」『東北歴史資料館研究紀要』四
平川　南　一九七九　「古代東北城柵再論」『東北歴史資料館研究紀要』五
本山幸一・桑原孝　一九八七　「河川交通」『新潟県史』通史編三
山田英雄　一九八六　「国郡制の成立・整備」『新潟県史』通史編一
吉田生哉　一九九五　「いわき市荒田目条里遺跡の調査」『第三七回福島県考古学会研究発表資料』
米沢　康　一九八〇　「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』三二―六
和島村教育委員会　一九九二～九四　『八幡林遺跡』
渡部育子　一九九一　「出羽における国郡制成立過程の特質」『新潟史学』二七
渡部育子　一九九二　「八世紀第1四半期の出羽と『沼垂城』」『新潟史学』二八

【追記】

報告の文章化にあたり、時間の制約で当日省略した部分を補うとともに、報告後の討論における意見も参考にした。また紙数の関係上引用・参考文献は最小限にとどめたことをお断わりしておきたい。また、報告にあたり左記の方々にお世話になった。記して謝意を表したい。

甘粕健・春日真実・金子拓男・川村浩司・熊田亮介・桑原正史・小池邦明・小林昌二・高橋保・田中靖・平川南・藤塚明・本間桂吉・松村恵司・山中敏史・山本肇・渡辺ますみ